

園番号 630

平成30年度 奈良市立富雄第三幼稚園 研究実践概要

園長名 小西 茂美  
全園児数 32名

1. 研究主題

「豊かな心を育み、意欲的に活動する幼児をめざして」  
— 表現力を高めるための援助や環境のあり方 —

2. 研究年度 2年度

3. 研究主題設定理由

核家族や少子化で、入園するまで子どもたちは家族中心で過ごすことが多く、同年齢の友達とのかかわりが希薄になっている。そこで、様々なひと・もの・こととのふれあいやかかわりを通して、環境や援助の工夫をし、表現力を高め、意欲的に活動する幼児を育てたいと主題を設定した。

4. 具体的な研究内容

①研究のねらい

幼児が身近なひと・もの・こととのかかわりの中で、様々な経験を重ね、自分で考えて行動し、楽しんで生活ができるように保育の創造に努める。

②研究の重点

- ・子ども達が自ら考え、創造しながら、意欲的に活動できるように環境構成や保育者の援助のあり方を探る。
- ・幼児が充実した幼稚園生活が送れるように保育者が一人一人の発達を把握し経験値を広げていく。
- ・保育園、小中学校、地域などのいろいろな人たちとの交流や連携を深め、感動できる体験を積み重ねられるように、保育の工夫をする。

③活動の方法

《4歳児》

事例1・・・『こんなん絶対できひん!』(5月)

クラスの一斉活動で、保育者が画用紙を切ってこいのぼりを作ろうと「こんなもの作るよ」と知らせると、A児が「こんなん絶対できひん!」と見ただけで、自分にはできないと思ったようだった。保育者が安心できるように、「大丈夫。みんなもするから一緒にやってみよう。」と声をかけたが、「みんなみたいにできひん!」と周りの友達みたいにはできないと決めつけて違いを感じていたようだった。そこで保育者が、「Aちゃんは絵をかくのが上手でしょ。みんな得意なことも苦手なこともあるのよ。これからもっと上手になると思うよ」とA児の得意なことを認め、友達と違いがあることも大丈夫ということを伝え、安心させることでA児が取り組むようになり、一つの小さな成功体験を味わった。

### 〈反省・評価〉

A 児は家庭において制作経験がなかったため自己否定するだけが A 児の精いっぱい  
の表現であった。保育者が A 児のあるがままを受け止め、否定認識を肯定認識へ高め  
ていけるように援助を行った。現在では、まだ苦手意識が先に立ってしまうが、活動  
を進めていくうちに「なんか楽しくなったきた」という言葉が本人の口から出てくる  
ようになってきた。



### 事例 2・・・『おおきいくみさん、すごいな。』（10月）

二学期になり、運動会で5歳児の姿を見て、「バルーンやってみたい。」「リレーすごい  
な。」とあこがれを持ち、だんだんと踊りも覚え、保育室の前で5歳児の動きをまねて踊  
るようになった。その姿から、憧れていた5歳児のバルーンをして満足感を味わわせたい  
と思い、「バルーンやってみようか。」と喜んで取り組み始めた。そばで見っていた5歳  
児が「ここは、こうするんだよ。」と手をあげて見せた。動きや表現を教えてもらい楽し  
そうに取り組んでいた。また、5歳児から「リレー一緒にしよう。」と声をかけてもらい  
仲間に入れてもらったことが嬉しく、5歳児に負けじと走る姿が見られた。

### 〈反省・評価〉

憧れていた5歳児に仲間に入れてもらったことで、4歳児たちは自分たちにもできる  
という気持ちを持つようになり、次の日には5歳児の姿をまねるように、自分たちだ  
けでもリレーをして楽しそうに遊ぶ姿が見られた。



### 〈5歳児〉

#### 事例 1・・・『イチゴできたよ』（5月）

4歳児の時からイチゴ・スナップえんどう・そら豆と春野菜の栽培に保育室前でプラ  
ンターに植え、取り組んできた。5歳児になり春を迎えると「わぁ花が咲いてる」「もう  
イチゴができてる」子どもたちはその変化に気づいた。赤くなるのを待ちわびていた。  
土日の休み明けに登園してくると「赤くなってる」「美味しそう」「食べたい」と5、6  
個ほどなっている嬉しさと食欲をどうすればいいか収穫しながらクラスで考え合った。

「どうする?」「みんなで16人やから順番に食べる?」「でもみんな食べたいやん」「分けたいやん」ということで半分ずつ分けて食べることにし、みんなでその甘さを味わった。

次々毎日赤くなってくると「うさぎ組さんにも分けてあげよう」「次からは1個ずつ食べたい」「先生にもあげなあかんわ」と自分のことだけでなく、他人のことも考えるようになり、先生の日ができた。

#### <反省・評価>

保育室の前に栽培を置き、日々子どもと一緒に育てていくことで、春野菜の変化に気づき収穫していく喜びを感じることができた。たくさんできることで子ども同士でどうしたら良いか考える題材となり、それぞれの思いを出し合うことができた。



#### 事例2・・・『グループの名前何にしよう』(10月)

遊んだ後自分の思いを話ができるように話し合いを繰り返していったり、4ヒントゲームなどみんなの前でヒントを言えるような経験をしていった。席替えでは4月ごろはカテゴリーを保育者が決め、グループ名は子どもたちが相談した。次第にカテゴリーも保育者と子どもたちで決めるようになっていき、そして、就健を終えた頃から保育者が入らないで子どもたちで決めていけると考え、全て子どもたちにまかせてみることにした。毎回季節や経験からのグループ名を付けていた。今回は何にするか保育者がたずねると「ハロウィンがいいな」「いやや」「果物は?」「前したで」といろいろ意見がでてきた。「じゃあ、皆で何がいいか話し合いで決めてみよう」と保育者が提案した。クラス皆で円になり相談始めた。A児「僕はC児」「ほんなら何がいいん」E児「好きな魚は」F児「それも前やったで」普段自分から意見を言えない幼児も言うことができた。いろいろな意見が出た頃にB児「他のみんなはなにがいい」と意見をまとめようとする姿も見られたがそれぞれに思いがあり、なかなか決まらなかった。G児「好きなキャラクターは?」D児「それ、いいな。マリオとかあるやん」E児「マリオ知らんし」B児「なんでもいいやん知ってるので。ポケモンとかもあるで」E児「ポケモンやったら知ってる」B児「そんならいけるやん。みんなどう」H児「それでいい」と他の幼児も頷いたり「それがいい」など言ったりしていた。B児「先生、みんなキャラクターがいいって」と決まったことを伝えにきた。それぞれグループに分かれ、グループ名を決め始めた。

#### <反省・評価>

遊びの話し合いやゲーム遊びなどみんなの前でも言いたいことが言える経験の場をその都度設けることで自分の思いを言葉で言うことの大切さを感じて



きたようである。その中で一人一人の思いの違いを受け止め、自分の思いだけでなく、友達の思いに寄り添い、共感していく姿につながった。

### 事例3・・・『秘密基地を作ろう』

1学期から釘と金槌を持ち、まずは木で個人で作品を作っていた。自分のちからでは手に負えなくなった時は友達に手助けを求めていく姿が見られるようになり次第にクラスで秘密基地を作りたいという思いがふくらんでいった。地域の方に協力をいただき、作ることに挑戦した。はじめは木に釘をそれぞれに打つことだけで自分の物という気持ちが強かったが、釘やのこぎりの扱い方が上達した。のこぎりは保育者に頼っていたが、「誰かここ持ってて」と押さえてもらって自分たちで切るようになった。疲れてくると「代わったるか」と友達同士で交代しながら誘い合って取り組んでいった。12月の終わりにやっと出来上がり、子どもたちも達成感を感じ大満足だった。

#### 〈反省・評価〉

みんなで何か一つの物を作る経験をさせたいという思いから金槌、のこぎりを持って秘密基地を作ることになった。それぞれにやってみたいという意欲を持つようになり、目的も持つようになった。それぞれに代わり合って、少しずつ進めて行くことで保育者が側にいなくても自分たちで取り組んで行けることを確信した。出来上がるとどの子どもやり遂げた満足感を味わうことができた。環境構成として、地域の方から協力を経て、木々を通してみんなで1つの作品秘密基地という大きな作品を作って行こうとする意欲につながった。



## 5. 研究の成果

- ・幼児が自分たちで遊びを進めていくには、環境を整えていくことが必要である。幼児自らかかわり、試行錯誤しながら取り組むことで意欲的な活動につながっていったと思われる。
- ・園内だけでなく、様々な人たちとのかかわりを持ち、交流する中で刺激を受けたり、他者との違いを知り、互いに高め合っていこうとする姿が見られた。

## 6. 今後の課題

自分の思いをうまく相手に伝えることや、集団の中で主体性を持って考えてすすめていくことが、まだまだ弱いように思われる。いろいろな人やものとのかかわりを積み重ねていく中で、創造性を育むために保育内容の見直しを図っていきたい。